

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史
第九号 二〇一五年三月 九五―一〇八頁
南山アーカイブズ

私の大学史編纂・大学史研究の遍歴と
大東文化歴史資料館での私の役割

谷本宗生

大東文化歴史資料館

My Journey of the University History Compilation and the
University History Study and My Role in Daito Archives

Daito Archives

TANIMOTO Muneo

Archeia: Documents, Information and History
No.9 March, 2015 pp.95-108
Nanzan Archives

- 一 大東文化歴史資料館と私の役割
- 二 私の大学史編纂・大学史研究の遍歴
 - (一) 私の大学史研究の始まり
 - (二) 『金沢大学五十年史』編纂の体験
 - (三) 東京大学史料室勤務の知見
- 三 『大東文化大学百年史』へ寄せる私の期待と覚悟

私の大学史編纂・大学史研究の遍歴と大東文化歴史資料館での私の役割

谷本宗生

一 大東文化歴史資料館と私の役割

二〇〇六（平成十八）年四月に、大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）が学校法人大東文化学園によって開設される。大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）のその目的は、「学園及び大学を始めとする設置校の歴史（校史）に関する調査及び研究」であって、そのために「校史に係る資料の収集、整理、保存及び公開」を行い、「学園及び設置校の発展に資すること」と宣言している（「大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）規程」第二条）。さらに、同上の目的のために、次のような事業を行うものと挙げている（「同上規程」第三条）。（一）校史の調査及び研究（二）校史の編纂（三）資料の収集、整理及び保存（四）資料の公開及び展示（五）展示場の管理及び運営（六）校史に関する情報の提供（七）自校史教育への支援（八）出版物等の編集・刊行（九）講演会等の実施（十）その他必要な事業。

二〇一四（平成二十六）年十月より、私谷本宗生が大東文化歴史資料館の計画に基づく、百年史編纂業務等を行

うことを職務として、新たに東洋研究所特任准教授として出向勤務することとなる。大東文化歴史資料館の創設時より、管轄事務の総務課や学内運営委員の教員らの尽力も受けながら、浅沼薫奈特任講師（東洋研究所）が現場で孤軍奮闘して『大東文化歴史資料館だより』第一〜十七号（二〇〇七年一月〜二〇一四年十一月）の編集刊行や歴史資料館展示室での展示企画の運営、そして本学創立九十周年の二〇一三（平成二十五）年にはブックレット版の『大東文化大学の歩んできた道』を編集刊行している。古川陽二館長のもと浅沼女史とともに、新たに大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）のスタッフになった私谷本は、二〇二三（平成三十五）年の学園創立百周年に向けての「百年史」編纂を、主としてその特色と課題を考える役割を担っている。

二〇〇六（平成十八）年の歴史資料館発足当初は、館長と事務職との構成員でスタートしながらも、規程に挙げられている大東アーカイブスとしての歴史資料館の業務などを考えれば、「必要に応じて、専任研究員（特任教員を含む）及び学術調査員を置くことができる」（「大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）規程」第四条）のとおり、現在浅沼・谷本という二人の専任研究員（東洋研究所特任教員の出向勤務）が配置されている。

なお学校法人としての大東文化学園の「文書保存規程」では、学園保存文書の取扱いは「原則として各部（室）課又は各事務室（以下「各部署」という。）で行い、保存責任者は各部（室）の課長又は各事務長（以下「各部署長」という。）とする」（「学校法人大東文化学園文書保存規程」第四条）とあり、文書の保存期間は永久、十年、五年、一年の四種と定められている（「同上規程」第五条）。ただし、校史にかかわる資料については、各部署で「廃棄しようとする文書が、校史の資料と思われるものについては、大東文化歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）と協議のうえ、移管等その処理を決定する」（「同上規程」第九条）と定められている。「大学の沿革及び校史の資料となる書類」は、保存年限上でも「永久保存」とされる。二〇二三（平成三十五）年の学園創立百周年に向けて

の「百年史」編纂の作業にあたっては、各部署の文書保存状況を実際に編纂スタッフらで確認しながら、理事会や評議会、教授会の議事録をはじめとした校史に係る有効かつ基本的な資料や情報を、この機会に原文書に限らずならなかのあたりで複製化してでも大東文化歴史資料館に収集することを試みたい。

二 私の大学史編纂・大学史研究の遍歴

(一) 私の大学史研究の始まり

二〇一四（平成二十六）年十月より、私谷本宗生は大東文化学園・大東文化大学に採用勤務することとなるが、私が今までに行ってきた大学史編纂の経験や大学史研究の遍歴について、これから『大東文化大学百年史』の編纂を従事するにあたって振り返って整理しておきたいと思う。

私は学部の卒業論文では『明治十年代の大学政策』（中央大学文学部所蔵）を取り上げ、大学院の修士論文では『森文政期の大学政策』（日本大学大学院文学研究科所蔵）を取り上げている。近代日本大学史研究の先人である大久保利謙や寺崎昌男らの研究著作（大久保利謙『日本の大学』一九四三年、寺崎昌男『日本における大学自治制度の成立』一九七九年）に真摯に学びながら、その研究上の特色や課題を認識する。大久保や寺崎らは、『文部省往復』や『評議会記録』といった学校公文書類を基本的な資料としながら、『東京帝国大学五十年史』や『東京大学百年史』といった大学史の編纂を行い、かつ自身の大学史研究も模索自立していった第一世代の象徴といえるだろう。そして彼らは、同時に学校関係資料の恒常的な保存公開施設（広義のアーカイブス）を提唱していく。この点は、個別大学史の編纂から大学史研究へと発展深化させる過程において、開かれた公共性を有するアーカイブスの役割に

において重要なポイントを提起しているのではないかと思われる。個別大学史の編纂完了から広義のアーカイブスへの設立移行に関して、大学史編纂の「後始末」にすぎないと揶揄する指摘はあまりに短絡的であろう。

私の卒業論文や修士論文で取り上げた研究テーマは、現在もなおしつかり継続した自身のライフワークの一環を形成している。帝国大学や第一高等中学校の教員や学生らの動向に注目して、どのような教育活動が実際に実施されていたのか、当時の教員や学生らにはなにを目指すべき目標としていたのかなど、当該者らの日記や回顧録類を資料として分析考察を試みている（第一高等中学校（一八八七年）の体操担当教員らの顔ぶれについて）「高等中学校生徒らの健康・衛生環境について―眼病予防・姿勢矯正・体操遊戯―」（一八八〇年代教育史研究会ニューズレター）第四十四号、二〇一四年一月、三（六頁）。

（二） 『金沢大学五十年史』編纂の体験

金沢大学で「大学五十年史」編纂に専任助手として平成九年から三年間余り従事し、『金沢大学五十年史』部局編（一九九九年）・通史編（二〇〇一年）を編纂する。『金沢大学五十年史』部局編・通史編は、現在金沢大学の学術リポジトリで公開されている。幕末から明治以降の前身各学校の設立変遷を追いながら、戦後改革期に新制国立大学の金沢大学となり地域の基幹総合大学となって発展していく様相を、国立大学の設立五十年にあたる一九九九（平成十一）年まで明らかにしたといえる。戦前期から北陸帝国大学設立構想があり、中央政府にも十分評価されていた幻の帝国大学構想であったことを、あらためて確認する。それが敗戦後の戦後改革期に、どの地域よりもいち早く総合大学の設立を地域挙げて動き出すことができた主要因であったものと思われる。この点は一個別大学の「五十年史」の特色にとどまらず、戦後大学史研究としても画期的な動きであったことを、私は編纂後に「新制国

立大学の成立過程―北陸総合大学設立構想―』『大学史研究』第十七号（二〇〇一年十一月、百五十七―百七十二頁）として論文化し発表する。

また自身の学位論文として、『近代日本官立高等教育機関設置の研究―金沢にみる設置過程を通して―』を纏め金沢大学大学院に提出し、二〇〇七（平成十九）年九月論文博士として受理され、博士（学術）を授与される。戦前戦後をとおして、高等教育機関群が金沢に設置されてきた過程を追求し、金沢という北陸の都市に「学都」という側面があり、「学都」金沢の形成過程の詳細を明らかにしたといえる。なお残された課題もいくつかあったため、学位論文の作成以降も科学費助成研究などを介して、石川県内の高等教育機関設置運動の始まりとされる明治期の高等中学校設置運動を検討し直して、石川県内の設置運動の背景にも専門教育、高等教育をめぐる葛藤や苦悩があり、当初から一枚岩の団結した動きであったとはいえない事情を丹念に明らかにする。また近隣地域にあたる福井県や新潟県などでも、高等中学校の設置をめぐる思いや考えが交錯する様相がみられ、石川県以外では専門教育、高等教育への志向が消極的であったと一面的に判断できないことも継続した調査によって確認する（「試論・第四区における高等中学校設置をめぐる地域事情について」『一八八〇年代教育史研究年報』第三号、二〇一一年十月、八十九―九十九頁）。

さらに、『金沢大学五十年史』編纂後に私の学位論文主査教員にあたることになる大久保英哲教授（金沢大学人間社会学域）とともに共同で、戦後の石川師範学校が戦時色をどのように払拭し、さまざまな新しい試みや実践を自ら志向していったのかを如実に示す文書資料として、金沢大学教育学部事務部で保管されていた『石川師範学校調査報告』（一九四六年）を、三年かけて『金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）』第四十九号（二〇〇〇年）・五十号（二〇〇一年）・五十一号（二〇〇二年）に復刻し解題考察を試みている。この石川師範学校調査報告は、

当時の「進駐軍」の要請に基づいて石川師範学校が作成したものであり、従前各地域の教育史研究にも取り上げられていない、占領軍側からの照会と当該師範学校との回答を示す貴重な文書資料といえよう。現在、「同上調査報告」は金沢大学資料館で保存されている。

『金沢大学五十年史』の編纂以後、私は金沢大学を退職し金沢を離れたが、幸い金沢大学資料館の客員研究員に就任し現在に至る。「大学五十年史」の編纂時に調査収集した前身学校資料や新制大学創設時の学校資料群は、創立五十周年事業をともに行っていた学内の大学資料館に移管される。現在、金沢大学資料館のホームページ <http://museum.kanazawa-u.ac.jp/> から、それら所蔵関係文書資料群の検索が可能である（『金沢大学史アーカイブ』整備事業が完成―資料目録をデータベース化し、資料館HP上で公開―）『金沢大学資料館だより』第四十四号、二〇一四年五月）。一般利用者に対しても、大学資料館では現資料を事前の利用請求に応じて、館の判断で支障ない範囲で出きる限り公開対応している。またデジタル化対応も、徐々に進められている。資料館のサイト上では、もっか「石川師範学校写真資料」（二百九十五件）「金沢大学図書館図画」（六十七件）「金沢病院設計図」（十四件）「第四高等学校物理実験機器」（百八十七件）「第四高等学校教育掛図」（百九件）「歴史科教授用参考掛図」（七十七件）「御即位大札図」（十一件）「シエライベル歴史指教図」（十四件）「医学教示図」（六十一件）「成瀬日記」（五十七件）「きのこムラージュ標本」（三十一件）「レアリスチックスクープ付属立体写真」（八十一件）が公開中である。

（三） 東京大学史料室勤務の知見

私は金沢大学を退職後に東京大学教育学部の助手（後に助教）となって、大学史料室（二〇一四年四月より大学文書館）に二〇〇三（平成十五）年から十年余り配属勤務し、『東京大学百年史』の編纂以後に残された東京大

学史の課題を大学史関係資料の身近でいくつか再確認することができて幸いであったといえる。大学史史料室の着任挨拶に、私は次のように記している。「専任室員に着任しました谷本宗生（たにもとむねお）です。専攻は、近代日本の大学史・高等教育史研究です。地道で着実な前任の「故」中野実室員の活動を継承していくつもりです。」（『東京大学史史料室ニュース』第三十一号、二〇〇三年十一月、十頁）

日本の大学史研究の先人にあたる故中野実さんの足跡を、私はヒストリアンとアーキビストの関係性から、慶應義塾福沢研究センター『近代日本研究』第二十三巻のなかで詳細に論評している（『東京大学史史料室と中野実の活動について』『近代日本研究』第二十三巻、二〇〇六年、百十三―百二十九頁）。中野氏が強調するアーカイブスとはなにか、それは大学史に関する知の集積を意味し、未来に向けての大学史研究交流の起点を目指すものであったと私には思われる。私も金沢大学や東京大学在職中に、さまざまなかたがたと出会い、不思議な因縁でそのかたがたと一緒に研究活動などを持続的に展開している。金沢大に資料調査に訪れた当時京都大学の大学院生であった富岡勝さん（現在は、近畿大学教授）と知遇を得て、現在では彼と一緒に外部研究委員として、松本市にある旧制高等学校記念館の運営活動にあたっている。また東京大学史史料室に戦時下の科学政策を調査するために訪れた、当時東北大学資料館の研究員であった吉葉恭行さん（現在は、秋田工業高等専門学校教授）と知遇を得て、現在でも科学費助成研究を共同で継続的に行っている。もちろん、富岡さんや吉葉さんだけにとどまらない。私がかつまで行ってきた大学史編纂や大学史研究において、多くのかたがたとの貴重な出会いと有益な研究交流があったといえよう。

大学史史料室発行の定期的な研究刊行物であった『東京大学史紀要』に、室員であった私は大学史史料室に調査研究に訪れて熱心に大学史の研究に専心しようとする学内・学外の大学院生らに、できるだけ『大学史紀要』に執

筆投稿する機会を示唆提供できたことも結果的にうれしい限りである。たとえば、当時東京大学の大学院生であった辻直人さん（現在は、北陸学院大学准教授）には「二十世紀初頭における文部省留学生の派遣実態とその変化についての一考察」『東京大学史紀要』第二十六号（二〇〇八年三月、二十一―三十八頁）を、当時東京工業大学の大学院生であった岡田大士さん（現在は、中央大学准教授）には「大学改革からみた科学技術人材養成の歴史とその比較―東京工業大学の戦後改革と一九三〇年代のマサチューセッツ工科大学における改革を通して―」『東京大学史紀要』第二十三号（二〇〇五年三月、八十四―九十六頁）を執筆してもらったが、彼らは自身の研究をさらに学位論文として纏め上げて、博士号を取得し現在も活躍している。もちろん、辻さんや岡田さんにとどまらず、次世代の大学史研究者らの研究支援に大学史史料室の活動が少しでも手助けとなったのであれば幸いである。中野実氏も理想として提唱された、大学史に関する知の集積、未来に向けての大学史研究の交流を、私なりになんとか実践しようと試みていたのかもしれない。

私自身はもう一つの定期刊行物である『東京大学史史料室ニュース』を介して、今まであまり周知されていない事柄や象徴的な出来事などを、大学史関係資料に基づいて解説紹介するよう積極的に試みている。それは同時に、大学・学園の歴史的な背景（物語の存在）を追究していくことにはかならないであろう。たとえば、初代帝国大学総長を務めた渡辺洪基（わたなべひろもと）が、なぜ忘れられた総長と称されるのか？私立学校などならば、建学の祖にあたる主要人物であろう。東京大学史の謎・秘話について、私はこのような素朴で不思議な疑問から、まずその解明に取り組んでみたいと考えたのである。現在に至る歴代総長のなかで、渡辺洪基だけが本学関係者でない経歴の総長であったといえる。渡辺は、国家学会や東京地学協会など多くの学術・社交団体の役職も兼ね、三十六会長の異名をとる人物である。渡辺洪基初代帝国大学総長は、実際にどのような施策を行ったのであろうか。不思議

議なことに、従前の「五十年史」や「百年史」といった東京大学史でも渡辺初代総長の具体的な施策については、いまだ十分に解明されていないのである。しかし渡辺初代帝大総長は、次々と帝国大学の整備・改革のための方策を検討実施している。学生の心身を活発にさせる帝国大学運動会（一八八六年七月）を保護し、土地家屋飲水及び学生の健康に関することへの注意喚起と改良を計画する帝国大学衛生委員（一八八七年九月）を設置する。また官公庁や民間企業などに宛て、分科大学生の貸費勧誘と大学院生の優遇・助成を要望（一八八六年五月）している。帝国大学が国会・社会にとって実際に有用であることを、分科大学及び大学院学生への学資支援の要請といったかたちで率先して表明したのである。そのいっぽうで、不必要な借財を行うなどの帝国大学生に対しては品行不良の過失として処罰する（一八八七年十月）としている。帝国大学で諸施策を行っていた渡辺総長のもとには、彼の施策を支えるブレインら（渡辺派）がいたであろうことが当然推測される。帝国大学書記官の永井久一郎や法科大学教授の木下広次ら、渡辺総長体制を支えた有能なブレインらの存在を今後より解明していくことが重要と思われる（「渡辺洪基初代帝国大学総長の施策について」『帝国大学年報』を手がかりに）『東京大学史史料室ニュース』第四十八号、二〇一二年三月、二〇三頁）。

私が勤めた東京大学は、戦後新制国立大学として五十年以上経過して、二〇〇四（平成十六）年四月、国立大学法人東京大学となり、大学史上において帝国大学（一八八六年）、東京大学（一九四九年）、そして国立大学法人東京大学（二〇〇四年）と、まさに重要な画期を迎えたといえる。帝国大学制度ができて五十年以上が経過して、新制国立大学制度が始まったが、その国立大学制度もまた五十年以上が経過して、新たな国立大学法人制度へと変貌していくことになる。法人化以降の現在、大学長である学園のリーダーとしての権限がより重要視され、社会的な責任（大学が果たすべき役割・大学の使命）を学園全体でより徹底して自覚するようもとめられている。東京大学

の場合は、歴史的にも大学長は学園全体を統轄する「総長」と位置付けられていて、Presidentと英訳される。ちょうど東京大学に勤務して一年ほどの私も二〇〇四（平成十六）年四月～八月、東京大学総合研究博物館と東京大学史料室共催の「東大総長のプレゼンス―渡辺洪基から内田祥三まで―」展示を企画開催している。この展示の狙いは、国立大学から大学法人へという一つの転換点に立つ東京大学において、「東京大学総長」という存在の多岐な意味を、歴史的な文脈で再考する機会となるべく企図して試みられたものである。歴代総長が執筆していた日記などを実際に展示したこともあって、見学利用者には好評であったといえる（『東大総長のプレゼンス―渡辺洪基から内田祥三まで―』展報告『東京大学史料室ニュース』第三十三号、二〇〇四年十一月、七頁）。さらに私は、大学教職員や学生らもっている優れた力を最大限に引き出しながら、学園全体を統括的に動かしていくことができるのが「大学総長」であると考え、歴代総長のなかから浜尾新・外山正一・長与又郎という三総長の逸話を『史料室ニュース』で取り上げて紹介考察する。彼らは優れた業績に加え、個性的な人物らであることに相違ないが、やはりその恩師を慕い想う本学学生・卒業生らの存在があつてこそ教育者としてもとても魅力的なのであると確信する（「戦前期の大学総長の人物像について―浜尾新・外山正一・長与又郎の逸話―」『東京大学史料室ニュース』第四十四号、二〇一〇年三月、四～五頁）。

また私自身が東京大学史料室・東京大学に勤務して痛感したのは、戦後の大学史研究においていまだ十分に明らかになっていない課題、問題点である。その一つは、所属学部である『東京大学教育学部六十年史』（二〇一一年三月）の編纂に従事できたことは幸いであつたが、戦前戦時と戦後との交錯・葛藤する関係性を、十分に捉えて「六十年史」に記述することができなかったことは惜しまれる。その一例ながら、旧軍部と帝国大学教育学との制度的なかかわりが問題視できる。軍将校の派遣学生らが一定期間、帝国大学の授業を聴講していたのである。『官

序往復』（現在は、東京大学文書館所蔵）といった公文書の記録資料を丹念にみても、陸軍海軍ともに帝国大学側に定期的に聴講生を派遣していたことがよく分かるのである（『新制大学の学部前史をどう捉えていくか―関係する史・資料の扱いを含めて―』『東京大学史史料室ニュース』第四十五号、二〇一〇年十一月、四―五頁）。またその一つは、一九六〇年代後半の学園紛争を経験していく過程で、東京大学が他大学よりも先駆けて「大学改革」の試みを自覚的に着手し始めた動向を、私は『東京大学史史料室調査活動―大学の自己点検評価の歴史的調査―基礎史料集―』（二〇〇八年三月）として中間報告を公表したが、残念ながら継続的な調査を十分に行うことができなかったことは惜しまれる。一九六〇年代後半の学園紛争の関係資料も、戦後大学史研究においてきわめて重要資料と位置付けられるであろう。当事者らの証言記録に加え、当時の改革関係資料群も悉皆的に収集整理されていけば、あの学園紛争を経験するなかで、大学はいかに自律的に学園を自浄化しようと志向し模索していたのか、解明していくこともいざれ可能であろうと思われる。

三 『大東文化大学百年史』へ寄せる私の期待と覚悟

私は、自身の金沢大学や東京大学での経験を踏まえて、これから『大東文化大学百年史』の編纂に臨むことになる。古川陽二大東文化歴史資料館長は、本学創立九十周年の記念ブックレット『大東文化大学の歩んできた道』（二〇一三年）の「あとがき」において、次のように述べている。「編者と読者との間の忌憚のないやりとりが百年史編纂事業の進展・深化に繋がっていくことを期待したい」（『同上書』百十二頁）とのコメントであり、私も同感である。たしかに、大学史・学園史は完成後にはまた新たな資料群の発掘やさまざまな多数の有益な評価知見を得て、必然

的に修正されていく宿命をもつものである。たとえば本学大東文化大学も、戦後に「東京文政大学」「文政大学」「大東文化大学」という名称変遷があったが、本学内ではどのような議論や動きが実際にあったのであろうか。残念ながら、従前の『大東文化大学五十年史』（一九七三年）や『大東文化大学七十年史』（一九九三年）でも、あまり明らかにはされていない。本学にとって校名改称という重大問題は、今後の「百年史」編纂においても十分な資料確認・資料批判を行って明らかにしていきたいと思う（「大東文化大学の歩んできた道のりをいかに捉え描き出すか―百年史へ向けての特色と課題について考える―」『大東文化歴史資料館だより』第十七号、二〇一四年十一月、一―二頁）。

最後に私は自身の持論ながら、大学史・学園史は「學術書」としての位置付けは重要であるが、やはり「学園物語」という「読み物」である工夫も忘れてはならないと考えている。それは、現代の少子高齢化社会へ向けての、大学・学園としての「説明責任」にほかならない。この点は、いずれ編纂される『大東文化大学百年史』において私の試みをぜひ示したいと思う。